

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870552

研究課題名(和文) 戦間期イギリスの国際博覧会におけるジェンダーと帝国

研究課題名(英文) Gender and Empire through the British Empire Exhibitions during inter-war Britain

研究代表者

佐藤 繭香 (SATO, MAYUKA)

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60433877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦間期において、イギリスが開催した大英帝国博覧会において、イギリスは帝国の「母国」としての優越性を示すためにイギリス女性の表象を使用したことを明らかにした。1918年に一部の女性に選挙権が与えられ、市民としての権利を獲得した女性たちは、トランスナショナルな女性運動を戦間期に展開したが、大英帝国博覧会においては、そうした「モダンな」女性たちの活躍も「文明国」としての威信を示すものとして捉えられた。

研究成果の概要(英文)：This research reveals that representations of British women were used as means to present British superiority as the "mother" country of the British Empire. In 1918, women, who were partly granted the vote and acquired citizenship, got involved in the transnational women's movement. However, those "modern" women were also utilized as the representations to display the prestige of the British Empire as the "civilized country".

研究分野：ジェンダー史

キーワード：イギリス ジェンダー史 大英帝国博覧会

### 1. 研究開始当初の背景

これまで行ってきた20世紀初めのイギリス女性参政権運動の中の女性表象に関する研究の中で、研究対象とする年代を30歳以上の戸主または戸主の妻である女性に選挙権が与えられた1918年までではなく、実際に男女平等の普通選挙権が達成される1928年までを視野に入れて連続的に考察していかなければならないのではないかと考えるに至った。イギリスジェンダー史においては、女性運動が始まったヴィクトリア朝時代、女性参政権運動が本格化したエドワード朝時代の研究が非常に厚く、大きな運動などがなかった戦間期の女性史はまだ研究が浅い。1928年に女性は男性と平等の普通選挙権を得ることになるが、1918年以降、市民権を得た女性たちのジェンダー役割や当時のジェンダー秩序に変化があったのかという研究は少ない。そうした意味で、この研究は、ヴィクトリア時代から第二次世界大戦前までのイギリスジェンダー史の総括的な流れをみることに寄与すると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦間期のジェンダー秩序や女性たちのジェンダー役割の変化を、ジェンダーを構築する装置としての博覧会を通して、検証することである。博覧会は、プロパガンダの装置であり、消費文化の広告媒体、大衆娯楽のショーとしての機能がある。特に、イギリス帝国が揺らいだ1920年代において、博覧会はイギリスにとって、イギリス帝国の団結を確認する機会であり、帝国における女性の位置づけを確認する機会でもあった。

戦間期にイギリスで開催された国際博覧会は、1924年から25年にロンドンのウェンブリーで、さらに1938年にグラスゴーで開催された大英帝国博覧会である。本研究では、特に、1924-25年の大英帝国博覧会を主に取り上げる。この時期は、トランスナショナルな女性運動も活発になっていた時期であり、女性組織も大英帝国博覧会という場でイギリス帝国内の女性に関する問題を議論する機会を設けていた。従って、この博覧会を通して、当時の女性運動の動きと合わせ、イギリス帝国自体がイギリスの女性表象をどのように示し、使用したのかを明らかにすることにより、戦間期の女性のジェンダー役割やジェンダー秩序を再考する。

### 3. 研究の方法

初年度は、まず研究の出発点として、国際博覧会に関する二次文献を幅広く収集し、読み込むことを目的のひとつとしており、それについてはおおむね順調に進めることができた。その他の目的としては、1920年代はじめに開かれていた女性をテーマにした商業的な博覧会についての一次史料を収集し、分

析することであったが、これについては、英国での一週間の史料収集を行ない、ロンドンのウィメンズ・ライブラリーでは、20世紀前半に行なわれた女性をテーマにした商業博覧会に関する記事にあたった。また、国立公文書館では1924-25年の大英帝国博覧会関連の公文書を複写することにより、基本的な史料を入手することができた。

平成27年度は、大英帝国博覧会の当時の評判、そして「女性部門」の果たした役割などについて調査した。前年度に行なった海外出張で収集した資料の整理や精読を主に行った。これにより、大英帝国博覧会がどのように企画され、『タイムズ』紙や『デイリー・メール』紙といった一般紙や『クウィーン』といった女性雑誌で、大英帝国博覧会がどのように報道されているかについて調査した。また、その他の女性雑誌などでどのように報道されているかを調査するために、一橋大学図書館に所蔵されている女性雑誌『イヴ』などを読み込んだ。インドやエジプトでのナショナリズムの盛り上がりやアイルランドの独立など、イギリス帝国は解体の危機にあった1920年代において、大英帝国博覧会は、本国の求心力を高める狙いがあり、大英帝国博覧会で展示されたイギリス女性たちが、イギリス本国の優越性を示すための表象として使用されたことがみえてきた。

平成28年度は、大英帝国博覧会における女性を表象として使用した展示の調査に焦点を当てた。展示内容の詳細を知るために、東京大学柏図書館に所蔵されている『ガス・ジャーナル』などの業界誌を調査した。また、英国での約2週間の資料収集を行なうことができた。グラスゴーとロンドンに赴き、特に、1938年にグラスゴーで行なわれた帝国博覧会の資料を中心に収集した。それだけでなく、グラスゴーでは、1924年の博覧会における「女性部門」のパンフレットを調査することもできた。グラスゴーでは、資料収集だけでなく、実際に1938年に博覧会が行なわれた会場跡地や現在残っている建物などもみる事ができた。

最終年度は、本研究の最終年度という位置づけから、戦間期の大英帝国における女性のジェンダー役割を明らかにするということに焦点をあてた。ロンドンの大英図書館や公文書館で、大英帝国博覧会に限らず、当時の女性組織等に関する新聞雑誌にあたり、その検証を行った。また、成果発表のための原稿を書き進めた。

### 4. 研究成果

研究成果は以下の3点に纏められる。

#### (1) 博覧会における女性の展示の歴史

1924年および25年に開催された大英帝国博覧会におけるガス展示では、女性を活人画のように演出し、ガスの利用法や有用性を展示した。国際博覧会における人種や「未開」とされた民族の「人間展示」の歴史について

は蓄積された研究もあるが、女性に関しても博覧会でその容姿などを見世物とする伝統が続いていたことが確認できた。1906年の苦汗産業展覧会では、実際の苦汗女性労働者たちが労働する姿を展示し、評判を呼んでいたが、19世紀後半から流行った活人画のように一つの場面を再現し女性を展示するという方法は、女性参政権運動でも取り入れられていた展示方法であり、大英帝国博覧会でもガス展示やペアーズ社による「美の殿堂」の展示でも見られた。女性を「もの」として鑑賞の対象としており、この展示を成立させている根底には、見られる対象としての受動的な存在としての女性、また、守られるべき対象として女性、また見た目(美)を重要視する女性観があることを検証した。これについては、一部を『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ』において触れたが、19世紀の博覧会から20世紀の博覧会までイギリスだけでなく他国も含めた研究が今後必要であろう。

## (2). イギリス帝国におけるイギリス女性の役割

1924年および25年の大英帝国博覧会の展示において、イギリス女性の表象は、宗主国イギリスの素晴らしさを示すものであり、イギリスの優越性を表す手段とされていたことを確認した。女性部門は、メアリー王妃をパトロンとして、ヨーク公爵夫人を会長として設立された「女性部門」には、海外からの客にホスピタリティを提供し、7月21日から26日に開催することが決定した「女性週間」を運営することが求められた。その活動をみると、イングランド中の女性たちに、海外旅行客をもてなし、楽しませるホステスの役割が期待されていたことがわかる。ヴィクトリア朝時代より中流階級以上の主婦に必須とされたホステスとしての技が、1920年代においても宗主国イギリスの文明度を表す手段とされていた。また、同時にイギリス女性には、イギリス帝国産の商品や生産物を消費する主婦としての役割が求められた。イギリス帝国の結束を高め、帝国の母国としてのイギリスを宣伝するために、伝統的なジェンダー役割が強化されたという側面も見受けられた。

## (3). 女性の活躍とモダニティ

戦間期は、トランスナショナルな女性運動が活発になった時期であった。第一次世界大戦後は、戦時中の共闘もあり、国内の自治領や植民地との心理的な距離が近くなっていた。女性運動においても戦前以上に、様々な女性組織の活動によって女性たちの国内のネットワークが広がっていた。博覧会における女性の積極的な参加、そして、社会・政治的な進歩は、「モダニティの視覚的なサイン」であった。つまり、女性の社会進出や女性が住みやすい環境の整った政策を行っていること示すことは、宗主国イギリス

の文明性、優越性を示すことにもなったのである。

つまり、イギリス帝国におけるイギリス女性とは、そのヴィクトリア朝的な伝統的な役割に加え、女性運動の中で獲得してきた新しいモダニティの両方を兼ね備え、帝国内における母国イギリスの洗練された文明度を表す存在であった。

こうした研究の成果は、国内の学会や国際学会での口頭発表、Proceedingsの出版などにより、社会還元がなされた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Mayuka Sato, 'Representations of British Women at the British Empire Exhibition 1924-1925', *Making Trans/National Contemporary Design History: Proceedings of the 10th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies*, 査読有り, 2016, pp.72-76.

〔学会発表〕(計4件)

Mayuka Sato, 'British-Japanese Suffrage Connection: Tsuneko Gauntlett and her network', Education, College Women and Suffrage: International Perspectives Conference, Royal Holloway, University of London, 13 June 2018.

佐藤繭香「戦間期の大英帝国博覧会にみられる女性表象」, 第13回ジェンダー史学研究会、武蔵大学、2016年12月18日。

Mayuka Sato, 'Representations of the British Women at the British Empire Exhibition 1924-1925', The 10<sup>th</sup> International Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, National Taiwan University of Science and Technology, Taipei, 26 October 2016.

佐藤繭香「大英帝国博覧会(1924-25)にみられるイギリス女性の表象」都市・女性・モダニティ研究会、津田塾大学言語文化研究所、2016年3月17日。

〔図書〕(計1件)

佐藤繭香『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ：エドワード朝の視覚的表象と女性像』彩流社、2017年、217。

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

佐藤 繭香 ( SATO, Mayuka )

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60433877